

巻 頭 言

学校長 山本 吉次

本校は、2014年4月に、文部科学省スーパーグローバルハイスクール（SGH）に指定された。5年の指定期間終了後、引き続き、2019年4月よりWWL（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアム構築支援事業の拠点校となった。いずれも管理機関は金沢大学である。この間、課題研究の一貫したカリキュラムを構築するとともに、グローバル・リーダーの基礎となる資質・能力を育成する挑戦的な授業を展開してきた。

本紀要の8本の研究報告のうち5本は、これらに関する実践報告である。校長山本吉次の「Society5.0に向けた高等学校のカリキュラム・マネジメント」は、SGH5年間の取組と成果・課題、WWL拠点校としての構想、これらを推進するために構築してきたカリキュラム・マネジメントについてまとめたものである。岡かなえ教諭の「「地方創生」を考える 高等学校国語科における授業方法の開発と実践」は、SGH・WWLにおける「課題研究」に国語科の授業がどうつながることができるのか、という課題のもと、地域経済分析システムRESASを用いた授業を提案したものである。川谷内哲二教諭と真木啓生教諭の「SDGsに協働的に取り組む授業実践」は、現実世界のオープン・エンドな問題解決に協働で取り組む数学国際コンテストA-lympiadの予選問題を教材として、数学科教員と英語科教員が協働で取り組んだ授業実践報告である。真木啓生教諭と山本潤平元本校教諭の「反転授業×ボトムアップ」は、昨年度実践した英語科の「反転授業」と保健体育科の「ボトムアップ型授業」について、「自律した学習者」をキーワードにして、対話型で自己評価したものである。宮崎嵩啓教諭の「地域活性化プロジェクト・実践報告」はWWLにおける課題研究「地域課題研究」の実践のうち、本校が立地する平和町を舞台に課題解決に取り組んだ「平和町プロジェクト」についての報告である。地域に軸足を置いた学校教育の可能性を探るものでもある。

一方、他の3本のうち、室谷洋樹教諭の「地理総合におけるカリキュラムの構想とその課題」は、2018年告示の学習指導要領によって導入される「地理総合」について、そのカリキュラムの在り方を模索し、「地理総合」が抱える課題を指摘した。それにより地理教育の在り方に示唆を与えようとするものである。渡會兼也教諭・北山智沙子（本校70回生）の「ビー玉スターリングエンジンの動作時間とビー玉の個数の関係」は、長時間継続するビー玉スターリングエンジン設計につながる、本校教諭と生徒の共同研究を報告したものである。川崎繁次教諭の「令和元年度 生活実態調査報告」は、2019年度の本校生の生活実態について調査・考察したものである。同調査は、2010年から3年おきに実施しており、スマートホンの所持率、ラインの利用率の高さから、その使用方法の課題を明らかにした報告であった。

文部科学省は2018年6月、「Society5.0に向けた人材育成」をまとめた。2018年告示の新学習指導要領も2022年度から年次進行で実施される。キーワードは、「探究」「主体的・対話的・深い学び」「カリキュラム・マネジメント」「社会に開かれた教育課程」などである。高大接続改革も、英語民間検定活用や大学入試共通テスト記述問題導入は頓挫したものの、AO・推薦入試の募集定員増加など、確実に歩を進めている。本校は、国立大学附属学校として、これらについて先進的実践研究を推進している。本紀要の各研究報告は、その成果をまとめたものである。読者の皆様からの忌憚のないご箴言やご批判を頂戴できれば幸いである。